



TITLE:

貌閲考

AUTHOR(S):

曾我部, 静雄

CITATION:

曾我部, 静雄. 貌閲考. 東洋史研究 1945, 9(3): 131-141

ISSUE DATE:

1945-11-05

URL:

<https://doi.org/10.14989/145829>

RIGHT:

東洋史研究

新第一卷
第三號

昭和十九年十二月發行

貌 閱 考

曾 我 部 靜 雄

神功皇后の三韓御征伐によつて、三韓の入貢となり、これによつて、三韓を通じて支那の文化が、我が國に流入するやうになるが、推古天皇の御代、直接に支那との正式國交が開けるやうになると、益々その風潮は盛んとなつた。故に我が奈良・平安頃の文物制度を研究せんとすれば、必ず支那の南北朝・隋・唐頃の文物制度を併せ研究するを要し、又支那の南北朝・隋・唐の文物制度を研究せんとすれば、亦我が奈良・平安時代の文物制度を必ず併せ見るを要する。我が國獨特の制度と思つてゐたものが、彼の國の制度であつたり、彼の國の文獻には詳しく説明がなきもので、我が國の文獻には却つて詳しく説明があつて、甚だ明瞭に知り得るなどの例が往々あり。而も我が奈良時代に、彼よりの輸入攝取は、割合速かに行はれたもののやうである。その一例を示さう。

唐の玄宗皇帝の天寶三年（皇紀一四〇四年・西紀七四四年・我が聖武天皇天平一六年）十二月に、雜徭・正役の負擔を軽くするために、中男の年齢を、それまで十六歳からなりしものを十八歳からと改め、又正丁の年齢をそれ

で二十一歳からなりしものを二十三歳からと改めるの詔が發せられ、更に又かの有名なる孝經一本を各家に藏せしむるの詔がこれと併せて發せられた。その詔は、唐大詔令集卷七十四に、親祭九宮壇大赦天下制なる題のもとに載せられ、又冊府元龜卷四百八十六や唐會要卷三十五にもその一部分が載せられてゐる。即ちその詔は次の通りである。

比者、成童之歳、卽挂輕徭、旣冠之年、便當正役、憫其勞苦、用惕千懷、自今以後、天下百姓、宜以十八以上爲中男、二十三以上成丁、(中略)自古聖人、皆以孝理、五帝之本、百行莫先、移於國而爲忠、移於長而爲順、永言要道、實在人宏、自今以後、令天下家藏孝經一本、精勤誦習、鄉學之中、倍増教授、郡縣官吏、明申勸課、百姓間有孝行過人、鄉閭欽服者、所由長官、具實以名薦、(中略)自今以後、如有不友不恭傷財破產者、宜配嶺西、用清風教、(下略)

我が國に於いても、唐の天寶三年より十四年後の奈良時代、孝謙天皇の御代、天平勝寶九年即ち天平寶字元年(皇紀一四一七年・西紀七五七年・唐の肅宗至德二年)四月に、唐のこの制度と同様な制度が發布されて、それまで中男は十七歳からなりしものを十八歳よりと改め、正丁は二十一歳よりなりしものを二十二歳よりと改め、又各家に孝經一本を藏せしむることとした。この時の詔は續日本紀卷二十や、類聚三代格卷十七などに見える。即ち、其天下百姓、成童之歳、則入輕徭、旣冠之年、便當正役、愍其勞苦、用軫千懷、昔者、先帝亦有此趣、猶未施行、自今已後、宜以十八爲中男、廿二已上成正丁、古者、治民安國、必以孝理、百行之本、莫先於茲、宜令天下家藏孝經一本、精勤誦習、倍加教授、百姓間有孝行通(過?)人、鄉閭欽仰者、宜所由長官、具以名薦、其有不孝不恭不友不順者、宜配陸奥國桃生・出羽國少勝、以清風俗、亦捍邊防、(下略)

とあり。日唐の兩詔を對照するに、如何にその内容が類似してゐるかが、容易に知ることが出来るであらう。

この詔の一例をとつて見ても、當時の唐よりの文物制度の流入が、割合早かつたことが判るのである。十四年後には唐と同様の制度を實施し、同様な詔までもが出されてゐる。このやうな支那文明の攝取に當りては、當時の我が國の人々は、非常な苦心を払はれたやうであつて、明治初期に泰西の文物を攝取するに、我々の先輩が非常な苦勞をなしたのと同様である。三代實錄卷六、清和天皇貞觀四年八月の條に、明法博士讚岐朝臣永直のことが見えてゐるが、その所に、

嘗大判事興原敏久・明法博士額田今人等、抄出刑法難義數十事、欲遺問大唐、永直聞之、自請詳解其義、累年疑滯、一時氷釋、遺唐之問、因斯止矣、

とあつて、清和天皇の御代頃に、刑法の條文用語などの解釋が出来ざるものが數十もあり、態々唐まで人を派遣して問はしめんとしたが、幸ひにして永直がこれを詳解したから、唐へ使を派遣することは中止となつたとあり。如何に當時の我が國の人々が支那文明の攝取に苦勞をしたかが、この一事をとつても窺ふことが出来る。かくの如く當時の人々は攝取に苦勞をし、慎重であつたが、同じ用語であり、制度であつても、彼我これが解釋を異にする場合も亦起り得る。私が既に史林等の諸雜誌に近頃發表したる課役・課口・不課口・計帳などは、彼我これが解釋を異にしたる例であるが、かかる例は他にもあつて、ここに述べんとする貌閱も亦その一例である。

貌閱とは簡単に言へば首質驗をすることである。容貌の美醜を調べたり、老若男女の區別を定めんために、一人一人について首質驗をすること、これを支那では貌閱と稱してゐた。このやうなことは古より行はれてゐたものであつて、後漢書卷十上、后紀序に、

漢法常因八月算人、遣中大夫與掖庭丞及相工、於洛陽鄉中、閱視良家童女、年十三以上、二十以下、姿色端麗、合法相者、載還後宮、

とあつて、後漢の時、毎年八月に一人々々について人口調査が行はれるが、その際に、洛陽郷中に於いて、良家の童女の容貌を調べて後宮に入れる可き者を選んだとあり。又周禮の地官小司徒の所に及三年則大比、大比則受邦國之比要、なる一文があつて、これに對して後漢の鄭玄は、

五家爲比、故以比爲名、今時八月案比是也、要請其簿、

と註をなし、唐の賈公彥は、

漢時八月案比而造簿書、

と疏をなして、矢張り漢時代、毎年八月に人口調査が行はれ、これを案比と稱したと傳へてゐる。而も尙ほ後漢書卷六九、江革傳には、

建武末年、與母歸鄉里、每至歲年縣當案比、革以母老不欲搖動、自在轅中輓車、不用牛馬、由是鄉里稱之日

江巨孝、

とあつて、縣の案比に當つて、江革は老母を勞はりながら、その案比の行はれる場所につれて行く様が載せられてあるが、この案比の語に對して唐の章懷太子、

案驗以比之、猶今貌閱也、

と註をなしてゐる。即ち漢時代の一人々々についての人口調査は、案比と稱し、これは唐時代に行はれてゐた貌閱に當るのである。これによつて貌閱の何んたるかが判るが、貌閱なる言葉は何時頃からあるであらうか。

貌閑なる語は史上では隋から見えてゐる。隋書卷二十四食貨志、文帝開皇三年の條に、

是時、山東尙承齊俗、機巧奔僞、避役惰遊者、十六七、四方疲人、或詐老詐小、規免租賦、高祖令州縣大索貌閑、戶口不實者、正長遠配、而又開相糾之科、大功已下、兼令折籍、各爲戶頭、以防容隱、於是計帳進四十四萬三千丁、新附一百六十四萬一千五百口、

とあるのや、隋書卷六十七や北史卷七十四にある裴蘊傳には、

未時猶承高祖和平之後、禁網疎闊、戶口多漏、或年及成丁、猶詐爲小、未至於老、已免租賦、蘊歷爲刺史、素知其情、因是條奏、皆命貌閑、若一人不實、則官司解職、皆遠流配、大許民相告、若糾得一丁者、令被糾之家代輸賦役、是歲大業五年也、諸郡計帳進丁二十四萬三千、新附口六十四萬一千二百、

とあり。兩例とも隋時代のものであつて、前者は文帝の開皇三年（皇紀一二四三年・西紀五八三年）のもの、後者は煬帝の大業五年（皇紀一二六九年・西紀六〇九年）のものである。而も兩例ともに民衆が租稅力役を免れんために、成丁でありながら未成丁と詐り、又成丁でありながら老男と詐る者多く、よつてこの姦僞を糾さんがために、貌閑が行はれて計帳の丁男、新附口の數が増したと言ふのである。これによつても明瞭に判る如く、貌閑は主として租稅力役を賦課する必要から、民衆の老若、成丁未成丁を區別するために、一人々々について首實驗をすることである。胡三省も資治通鑑卷一百七十六開皇五年の條、及び卷一百八一大業五年の條に註をなして、

貌閑者、闊其貌以驗老小之實、

と述べてゐる。この老小、成丁未成丁の區別は、租稅の賦課にも關係あるが、一番多く關係あるは力役賦課に於いてである。班田收授法の行はれてゐた隋唐頃は、力役は歲役（正役）と雜徭とに分れ、雜徭には中男・丁男が

服するが、歳役には丁男が服するのが原則であつた。故に中男・丁男でありながら、小男・老男或は不具廢疾者と僞れば、かかる役は免れる譯であり、又かかる方法で民衆は盛んに免れんとした。よつて首實驗をなして申告と實際とを照合する必要が生れ、かく確めて後に帳簿が造られた。その帳簿が計帳である。計帳は課役を賦與するために造るものであるが、課役の解釋については、我が國と隋唐とは異つてゐたから、唐では歳役と雜徭との賦課のために造つて居り、我が國では調と庸（歳役の代償）の賦課のために造つてゐる。これ等については他誌に詳論することになつてゐる。

かくの如く隋に於いて貌閱が行はれてゐたが、この貌閱と至大なる關係のある計帳が、既に西魏、北周頃に行はれてゐたるを考慮するならば（周書蘇綽傳）、貌閱なる制度も亦、この頃に同時に造られたものであらう。唐に至ると、その令に規定されてゐる。即ち仁井田博士編、唐令拾遺戸令第九、開元二十五年の令には、

諸戸、計年、將入丁老疾、應徵免課役、乃給侍者、皆縣令貌形狀、以爲定簿、一定以後、不須更貌、若疑有姦欺者、隨事貌定、以附於實、

とあり。唐令の系統をひく我が養老の令にも略、これと同様の令が見える。即ち養老の令の戸令造帳簿の條に、凡戸口當造帳籍之次、計年、將入丁老疾、應徵免課役、及給侍者、皆國司親貌形狀、以爲定簿、一定以後、不須更貌、若疑有姦欺者、亦隨事貌定、以附帳籍、

とあり。唐令と養老の令とを比較するに、二三語が異なる以外は、大體相似てゐる。その相違する點は、唐令には何時とは言つてゐないが、養老の令には帳籍を造る時と言つてゐる。帳籍とは計帳と戸籍のことであつて、その際にかかる貌閱を行ふと言つてゐる。しかしかく養老の令には言つてゐるが、兩者共に、「年を計り、もつて丁老

疾に入れ、まさに課役を徵免し、及び給侍すべきものは、皆縣令（國司）が形狀を貌し、云云」と言ひ、年を計算して、丁男や、老男や、疾病者に入れ、それによつて課役に徴したり免じたり、或は侍丁とて病人、老人や人の死に侍べる者は課役を免ぜられるが、それ等の課役の徵免者に對しては、縣令（國司）はその形狀を貌閱すると言ひ、即ち課役徵免のために貌閱をなすと言つてゐる。課役の徵免は日唐共に計帳によつてなされるのであつて、戸籍によつてではない。事實又戸籍は日唐共に、主として戸口の籍であり、班田收授法による田土の籍でもあり、それに對して課せられる田租の籍でもある。課役とは直接あまり關係がない。故に養老の令に帳籍とあるも主として計帳を造る場合と解すべきであらう。

而して計帳は、日唐共に毎年造り、戸籍は、唐では三年目毎に、我が國では六年目毎に造ることになつてゐたが、この計帳を造るに際しては、各家より家族の姓名年齢等を記載した申告書を提出せしめた。これを手實と言ふ。令集解、造計帳條に見ゆる古記には、手實、謂戸主造所計帳也と説明してゐる。計帳並に手實についての日唐令を掲げんに、唐令拾遺、戸令第九、武德令及び開元七年の令には、

諸每歲一造計帳、里正責所部手實、具注家口年紀、

とあり、又養老の令の戸令、造計帳の條には、

凡造計帳、毎年六月卅日以前、京國官司、責所部手實、具注家口年紀、（下略）

とあり。仁井田博士の唐令拾遺は我が養老の令をも參酌して復元したのであるが、兩者は相似てゐる。計帳は共に各家の申告書である手實を基としてここに造るが、各家では課役に服すべきもの、又免ぜらる可きものをこの際申告すべきである。然るに上述の隋の例でも判る如く、支那ではいつも力役を免れんとて百方手段を盡すから

官では民衆よりの申告をそのまま信用することは出来ない。申告と實際とを照合する必要がある、その照合が即ち貌聞であつて、日唐令中に貌形狀、更貌、貌定などある貌は、何れもこの貌聞を意味してゐるのである。民衆よりの偽の申告を防いで課役賦免の公平を期する目的で、この貌聞の條文は造られたのであつて、首實験をして眞偽を確かめば、それでこの條文の要求する所は果された譯である。

唐では以上の如き目的にてこの條文を造り、又その如くにこの條文を運用して計帳を造つた。然るに我が國に於いては、この條文を非常に善意に解釋して運用し、その結果非常に面白い唐とは異つたる計帳が造られた。この條文の皆國司親貌形狀、以爲定簿、の所には、清原夏野の義解や、令釋、穴記、古記などの集解の解釋が多く載せられてゐる。何れも唐の如く姦偽を防ぐものとは解せず、頗る善意な解釋をなしてゐる。穴博士の穴記を一例として示すと、

國司親貌形狀、以爲定簿、謂假年廿一、雖形狀亦合年、見其身體、尪弱不堪丁役者、依身之體之形狀、不入丁也、但其年者、依實注附耳、不増減、又年十六、見其形貌、亦不違今見其體、雖堪丁役、亦不入丁、即ち假りに二十一歳のもので、その形狀も二十一歳のやうであるが、その身體が非常に虚弱で丁役に堪へ得ぬものは、年は二十一歳と注附するも、丁男の中には算入せず、又假りに年が十六で、その容貌も十六歳のやうであるが、身體は大きく丈夫で丁役に十分堪へ得るやうな場合でも、これは丁男の中には算入せずと解釋してゐる。今の兵隊検査で合格不合格を決定するのと同様に解釋してゐる。穴博士以外の解釋も亦、大體このやうなものであつて、支那の如く姦偽を防ぐためのものとはなせず、頗る民衆を信じ、民衆の利益のために、善意に解釋しそのやうに法を實施したやうである。それ所か、かく隋唐とは異つた解釋をなし、善意に解釋した結果、他の豫期

せざる貴重なる收穫を後世に残してゐる。

貌閤とは、既に述べた如く、隋唐では計帳を造る場合、虚偽の申告を防止するために、申告と容貌とを照合する制度であつて、かくの如き首實驗をすれば、それで貌閤が負ふ使命は隋唐では果し得たのである。然るに我が國ではこれとは異つた善意なる解釋をなした結果、貌閤を亦各人の容貌を見、その特徴を調べる制度ともなし、今日西歐諸國や、新興滿洲國にては、戸籍に各自の指紋を附する制度が行はれてゐると聞くが、このやうな文明的な各自の容貌の特徴を計帳に記入する制度を實施するに至つた。ここに日唐計帳の實例を掲げよう。

一、佛國々立圖書館所藏登錄古文書番號第貳六五七、玄宗天寶九・十年頃、敦煌縣龍勒郷の計帳、

(前缺)

| | | | |
|--------|----|------|--------|
| 弟 | 崇 | 載冊二 | 衛士 |
| 張大俊 | | 載五十七 | 翊衛 |
| 弟 | 仙芝 | 載卅五 | 柱國子土鎮 |
| 弟 | 仙玉 | 載廿五 | 柱國子土鎮 |
| 呂懷金男崇愛 | | 載廿五 | 白丁終服 |
| 甥 | 崇慶 | 載十八 | 中男終服 |
| 弟 | 崇玉 | 載冊八 | 上柱國子土鎮 |

(以下略)

二、奈良正倉院尊藏越前國江沼郡山背郷天平十二年計帳、

戶主江沼臣族忍人戸「計帳手實」

合今年計帳定見良賤大小口參拾玖人男廿三
女十五

不課口貳拾陸人

男拾人小子七
餘九三

女拾陸人

奴壹人

課口拾貳人

中男參人

見輸玖人

半輸陸人兵士一
侍三
惣七

全輸參人

輸調純貳匹壹丈伍尺

庸綿參屯

戶主江沼臣族忍人、年肆拾肆、正丁、鄉長、右頗疵

母江沼臣族宇須彌賣、年陸拾參、老女額黑子

妻江沼臣族虫名女、年肆、正女、左頗黑子

弟江沼臣族波太麻呂、年貳拾、中男、額黑子

(以下略)

佛國々立圖書館所藏の計帳は、歴史と地理卷三十三に連載された那波利貞博士「正史に記載せられたる大唐天寶時代の戸數と口數との關係に就きて」より轉載したものであつて、從來この文書に對しては、計帳なる名稱は下されてゐなかつたものであるが、私はこれこそ唐の計帳であると斷定して、史林その他二三の學術雜誌に發表し又發表せんとしてゐるものである。正倉院尊藏の計帳は竹内理三氏編、寧樂遺文より轉載したものである。

日唐の計帳をここに比較するに、内容は非常に異つてゐる。この相違は主として計帳を造る目的である謀役の解釋を、我は詞・庸（歳役）、彼は歳役（庸）・雜徭となした所から來てゐるのであつて、それについては他誌で詳論することになつてゐるから、ここでは述べないが、他の一つの相違は、唐の各人の容貌の特徴は何等記載せず、我のは一つ一つ記載してあることである。この相違は、貌閑の解釋の相違から來てゐるのであつて、それについての説明は最早や必要はないであらう。西田直二郎博士の説によれば、計帳に於けるこの各個人についての記載の精細なることは、個人に關する注意が、時代の意識の上に高まつて來たのを物語つてゐるとされてゐるが、（同博士著日本文化史序説頁二四六）、この個人に關する注意々識が高まつてゐたことからして、貌閑も自然とそのような方面に解釋して、かくの如く後世に有益なる結果を残すに至つたのであらう。（昭和十九年七月十七日稿了）

註

①後漢書后紀序、周禮地官小司徒、鄭玄・賈公彥注疏、後漢書江革傳などに見ゆる貌閑についての諸例は吉田虎雄氏著兩漢租税の研究によつて知り得た。

②資治通鑑卷一百七十六は、開皇三年の貌閑のことを開皇五年としてゐる。大業五年にも同様なことが行はれたから、それとこれとを混同して開皇五年となしたのであらう。隋書食貨志によると、五年は三年の誤りである。